

## キリストの降誕

柳 井 一 朗

奨励者紹介 [やない・いちろう]

日本キリスト教団洛西教会牧師

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、  
地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

(ルカによる福音書 2章1—20節)

### はじめに

本日12月20日、同志社京田辺会堂言館礼拝堂で、待降節礼拝の奨励の時が与えられましたことを感謝いたします。

はじめに、新しく造られた礼拝堂に入りました。それも待降節という特別な季節に。

さらに、本日の礼拝において、同志社グリークラブの讃美奉仕がなされました。ありがとうございます。去る10月28日、「同志社フェア in 高梁」(同志社大学主催、同志社校友会岡山県支部協力)に、私は京都から参加しました。その時に、同志社グリークラブの皆さんが、歌を歌われました。ありがとうございます。

た。

### 日常生活の中での光

さて、私が毎日使っている車は、7年半で走行距離22万キロを走りました。今年の1月から右のヘッドライトの調子が悪くなりました。ライトの調子が元通りになったのは12月になってからです。今度は12月になってから、左のヘッドライトの調子が悪くなってきました。短期間ではありますが、夜間、両方のライトが同時に消えてしまう症状が現れ始めました。片方のライトが点灯しているだけでも、よく前方を照らしているように感じますが、それでも両方が点灯しているときに比べると半分の照らしようです。今は、両方のヘッドライトがちゃんと点灯するようになりました。当たり前のことではありますが、夜間、車の照明は前方をよく照らして、しっかりと見えるようになりました。私は普段の生活を通して、こうして「光」の大切さ、ありがたみをよく知っています。

### 聖書の中での光

一方、聖書によると、東からやって来た博士たちは、「星の光」に導かれて、幼子イエスの居場所を知らされ、お祝いの品を捧げて、その喜びを受け入れられました。星の導き、輝き、その先を照らして、明らかにするという点において、とても大切な役割を果たしています。ですから、クリスマスツリーのでっぺんに、星を取り付けるということは、大切な意味があると思います。

博士たちは、こうして、星に導かれて、幼子イエスに会いました。聖書に書かれているこの出来事は、クリスマスを迎える私たちに、一体、何の意味があるのでしょうか。

クリスマスをお祝いするということは、喜びです。しかし、私たちの毎日の生活は、クリスマスを喜び祝っても、幸せ、楽しいことばかりではありません。日々の生活で苦しいこと、辛いことも、たくさん経験させられます。

それでもなお、クリスマスをお祝いすることを通して、「主にある平安」を得られるのです。このことがクリスマスをお祝いする深い意味であると思います。

「主にある平安」とはどのようなことなのでしょうか。私は信仰において次のように受けとめています。それは、いつどんな時にも、楽しい時も、辛くなく、苦しみが伴う時にも、主がこの私を見守られて、この私を決して離されない。わたしを独りのままで置いておかないということを確認することです。

しかし、私たちは、一度確信したことをずっと信じ続けられるほど、強い人間ではありません。ですから、毎年、クリスマスをお祝いすることを通して、博士たちが、星に導かれて、幼子イエスの誕生を祝い、喜びにあふれたという聖書を読み返して、神がなされる救いの業を受けとめ、心を安らかにすることが求められているのです。

イエス・キリストの誕生を喜び祝うとは、楽しいひとときを過ごすことだけではありません。私たちの人生の途上で、いついかなる時にも、救い主イエス・キリストは私たち一人ひとりのことを見守り続けておられるということを受け入れることです。このことが、「主にある平安」の本当の意味です。

まもなく新しい年を迎えます。この礼拝に出席されているお一人おひとりの上に、救い主イエスの誕生を祝うことを通して、「主にある平安」が豊かに与えられますように、お祈りいたします。

2017年12月20日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録